

## 私が見つけた看護

「じいちゃん、要介護5になったよ」10月、祖母から電話越しにそう告げられた。夏休みに祖父母の家を訪れたとき、祖父は私の顔を見るなり、笑顔で「おかえり」と言ってくれた。歩く速度はゆっくりではあったが、自分の足で歩き、食事も少量ながら自分で口に運んでいた。いつもと変わらない、穏やかな祖父の姿がそこにはあった。その祖父が、わずか2か月後に要介護度の中で最も重い要介護5になるとは、その時の私には想像もできなかった。祖母の話では、急激に食事量が減ったことをきっかけに、体力や活動量が目に見えて低下し、日常生活の多くに介助が必要になっていったという。高齢者の身体機能は、ほんの些細な変化をきっかけに、大きく低下してしまうのだと、身近な存在を通して実感した瞬間だった。

その知らせを受けたとき、私はちょうど実習中で、脳性麻痺の患者さんを受け持っていた。構音障害があり、言葉が聞き取りにくく、必死に耳を傾けても思うように意思疎通ができない。自分の関わりが本当に相手の力になっているのか分からず、学生としての未熟さや無力さを強く感じていた。そんな私に教員は、「大丈夫、何度も関われば絶対わかるようになるから、大丈夫」と声をかけてくれた。私は正直、無理だと思っていたが、その言葉を信じ、毎日患者さんのもとへ足を運び続けた。すると次第に、表情や声の調子、わずかな仕草から気持ちが分かるようになり、会話が通じたときには笑顔を見せてくれることが増えていった。初めて見せてくれたその笑顔は、今でも忘れられない。その後、教員から「ずっとベッド上から同じ景色を見続ける生活の中で、あなたが顔を出して笑顔で話しかけ続けたことは、患者さんにとって大きな支えになっていたし、その人の生活に、きっと大きなものを与えられたと思うよ」と伝えられた。これらの実習を通して、私は「分からないからこそ、関わり続けることが看護なのだ」と感じ、自分自身の成長を身をもって感じる事ができた。

ちょうどその頃に、祖母から祖父が要介護5になったという電話があり、私は自然と「私がいるから大丈夫だね」と口にしていた。それはまだ看護師の資格もない学生の根拠のない言葉ではあったが、実習を乗り越えた直後だからこそ、心の底から出た偽りのない言葉だった。祖母は涙を流しながら私がいってくれてよかったと言ってくれた。もし実習の経験がなければ、私は自信を持って伝えることはできなかったと思う。人の不安に寄り添い、安心を与えることができたこの経験は、私にとって看護の原点となった。今まさに看護を学んでいる私だが、祖父と祖母、そして実習で出会った患者さんとの関わりを通して、私は看護の道に進んでよかったと強く感じている。